

氏名（本籍）	おち	あい	よし	のき	（神奈川県）
	落	合	良	行	
学位の種類	教育学博士				
学位記番号	博乙第325号				
学位授与年月日	昭和61年7月31日				
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	心理学研究科				
学位論文題目	青年期における孤独感の構造				
主査	筑波大学教授	教育学博士	加藤	隆勝	
副査	筑波大学教授	教育学博士	高野	清純	
副査	筑波大学教授	文学博士	臺	利夫	
副査	筑波大学助教授		門脇	厚司	
副査	筑波大学教授	教育学博士	岡田	明	
副査	筑波大学助教授	教育学博士	市村	操一	

論 文 の 要 旨

本論文は青年期における孤独感の構造とその発達の変容について、多面的、系統的に検討したものであり、以下の5章から成っている。

- 第1章 孤独感研究の展望と本研究の問題
- 第2章 青年期における孤独感の規定因構造の解明
- 第3章 青年期における孤独感の類型
- 第4章 生活感情の関連構造からみた孤独感
- 第5章 青年期における孤独感の構造と人格形成

第1章では、孤独感に関する実証的研究を展望した上で、従来の研究が一面的、単発的な段階にとどまるものが多く、多面的、系統的な検討に欠けることを指摘している。本研究ではこうした展望をふまえ、構造的アプローチと発達のアプローチの2方向から孤独感の特質を総合的に解明しようとする。構造的アプローチとは、時間の視点を入れずに、“いま”の心理状態を解明する方法であり、次の三つのアプローチが含まれる。すなわち、①孤独感はなぜ生じるのかという

孤独感の規定因についてのアプローチ、②孤独感を類型化してとらえるアプローチ、③他の生活感情との関連から孤独感をとらえるアプローチ、である。また、発達のアプローチとは時間の軸上での変化をみていく方法であり、①青年期内的変化をとらえるアプローチ、②青年期を人間の生涯発達の中で相対的に位置づけ、その特徴をとらえるアプローチ、の二つが含まれる。

第2章では、青年の孤独感の規定因を明らかにするため、まず、高校生を対象に文章完成法による記述的、探索的な研究が行われた。次にそこで見出された2要因を組み合わせて60項目の短文が作成され、Q技法によって孤独感の構造を仮説検証的に解明する方法がとられた。その結果、青年期の孤独感の特質は、対他（人間同士の理解・共感はあるか否かという感じ方・考え方）、対自（自己の存在のし方への目の向け方）の2次元によって解明できることが明らかにされた。また、中・高・大学生を対象に、青年期内的発達の变化をみると、孤独感の構造は、中学生の段階では対他の次元による一次元構造を示し、高校生になって対自の次元、すなわち個別性の自覚が表われてくることが明らかになった。さらに、成人期および老年期までの変化を検討した結果、青年期以後の孤独感の構造には時間的展望の次元が加わり、対他、対自、時間の3次元に規定されることが明らかにされた。

第3章では、第2章で明らかにされた2次元をもとに孤独感の類型化の方法が検討され、類型判別のための尺度（LSO）が作成されて、その妥当性、信頼性の検討がなされた。また、同尺度を用いて類型からみた青年期の孤独感の発達の变化が検討された。その結果、青年期の孤独感には次の4類型に分類するのが適当であることが示された。A型—現実にかかり合っている人と理解・共感し合えると考え、自己の個別性には気づいていない者が感じる、自分はひとりだという感じ。B型—現実にかかり合っている人とは理解・共感できないと考えているが、自己の個別性には気がついていない者が感じる、自分はひとりだという感じ。C型—現実にかかり合っている人とは理解・共感できないと考えており、自己の個別性には気づいている者が感じる、自分はひとりであるという感じ。D型—現実にかかり合っている人と理解・共感し合えると考えていて、自己の個別性に気づいている者が感じる、自分はひとりであるという感じ。なお、類型の発達という面からみると、年齢が増すにつれて、A型→B型→C型→D型へと変化していく傾向が示唆された。

第4章では、青年期における代表的な生活感情の関連構造を明らかにし、生活感情の中における孤独感の位置、特徴が検討された。最初に質問紙の結果にもとづいて、青年の感じている代表的な生活感情が選定され、次にクラスター分析と因子分析により、孤独感を中心とする青年期の生活感情の関連構造が分析された。また、青年期内的発達変化及び青年期と成人期、老年期の比較検討が進められた。その結果、①生活感情の関連構造は、関係性の次元と、志向性の次元で解明できること、②青年期における孤独感には、疎外感、不安感、自己嫌悪感、劣等感と類似した面をもつ感情であることが明らかにされた。また、上記の4感情を関係性と志向性の2次元上に位置づけると、孤独感には疎外感よりも関心が自己に向かっている時に感じる感情であり、不安感

よりも関心が他者との関係に向かっている時に感じる感情であること、また、孤独感は、自己嫌悪感や、劣等感よりも、人との親和を志向し、それがうまくいかない時に感じる感情であることが示された。また、青年期の孤独感は他の時期に比べると、自己嫌悪感などとの関係が強く、自己の内面に目を向けた時に感じる点に特徴がみられる。青年期内では、年齢が上になるにつれて、親和志向ばかりでなく、達成志向が実現しない状況でも孤独感を感じるようになることが示唆された。

第5章では、孤独感と人格形成に関する研究をまとめた上で、本研究の結果が考察された。孤独感が人格形成上、肯定的な意味をもつか否定的な意味をもつかは、孤独感の種類によって異なることが論じられ、特にC型の孤独感は人格形成上否定的な意味をもちやすいとされた。そして、孤独感が人格形成上肯定的な意味をもつのは、「人間の個別性を自覚し、人と理解・共感することはむずかしいと感じながらも、理解・共感しようとする」ところにあると結論づけられている。

審 査 の 要 旨

青年期における、いわゆる自我の発見は、自我と非自我の分離を意識させ、孤独の体験を伴うものとされている。しかし、孤独感という内的世界の特質を実証的に検討することはきわめて困難で、これまで十分な成果はあげられていない。本研究では構造的アプローチと発達のアプローチの2方向から孤独感の特質を探究し、青年期の孤独感の規定因を解明するとともに、青年期内の発達的变化及び青年期から成人期を経て老年期に至る変化をも明らかにしている。また、代表的な生活感情の関連構造を検討して、孤独感と他の諸感情との位置関係について詳細な分析を行うとともに、この場合も青年期から老年期に至る変化を追究している。これらの研究はいずれも従来試みられたことのないものであり、著者の独創的構想と大学院生時代からの一貫した研究の積み上げによる成果として高く評価できる。

また、近年はアメリカを中心に孤独感の研究が盛んになりつつあるが、そこでは孤独感が専ら人格形成上否定的な意味をもつものとして扱われていることが多い。これに対して本研究は一貫して、孤独感の否定的な面とともに肯定的な面に注目し、人格形成上の意義を考察している。この点にも本研究の独自性が示されている。

ただし、本研究も調査対象となった青年が学生、生徒に限定されており、結果を一般化する場合により慎重な配慮が必要であること、また因子構造の比較の方法など、分析方法についてはさらに工夫が望まれること、現代青年に特有な孤独感の特質は社会文化的条件との関係からも分析される必要があること、などの問題点も指摘される。

しかし、これらは本論文の全体の評価を損うものではない。未開拓の研究分野を切り開き、多くの新しい知見を加えた本研究の意義は大きい。

以上により、本論文は教育学博士論文に値するものと判断された。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。